

ADVANレーシングタイヤインフォメーション

2007年 SUPER GTシリーズ第7戦

2007.9.9

MOTEGI GT 300km RACE



全9戦で争われるSUPER GTシリーズは激戦を重ね、残すところわずか3戦。また、ツインリンクもてぎで行われる、この第7戦からドライバータイトルの有効ポイント制度もなくなり、獲得したポイントすべてランキングの決定要素となるため、今までのレース以上に取りこぼしが許されなくなる。

前回のシリーズ第6戦は、伝統の『鈴鹿1000km』として開催された。予選からECLIPSE ADVAN SC430が好調で、1回目には5番手、そしてスーパーラップでは、さらに3番手まで躍進を果たした。決勝でも勢いは保たれ、25周目から最初のピットストップを行った34周目までトップを走行。しかし、その後3番手を走行している最中に、異物を拾って右リヤタイヤが破損、何とかピットにはたどり着いたものの、ダメージは車体にも及んでおり、わずか50周でリタイアを余儀なくされた。一方、WOODONE ADVAN Clarion Zは予選こそ15番手だったものの、オープニングラップのうちに12番手に浮上、その後も着実に順位を上げて続いていたのだが、8番手争いで接触があり、ドライビングスルーペナルティを課せられてしまう。そのため、順位を落としたものの、長丁場のレースをしっかりと最後まで走り抜いて10位という結果を得た。

鈴鹿での記憶に残る走りから、これまでの開発が正しく進められていたことを証明した。今回はGT500クラスに2種類のタイヤを用意。ミディアムは実績あるゴムを用いているのに対し、ソフトはよりグリップの向上をはかったゴムを新たに採用している。もてぎはストップ&ゴー

の繰り返されるレイアウトで知られ、なおかつ抜きにくいサーキット。そのため、普段のレース以上に予選を重視すべく、新ソフトバージョンを投入する。本戦では、この新ソフトの使用を推奨するが、ゴムがやや軟らかめのため、タイヤ選択がチームやドライバーの戦略の一つとなる。

GT300クラスではプリヴェ KENZOアセット・紫電が、予選ポールポジション、本戦でのファステストラップを加えた完全優勝を果たし、チームポイントでトップ、ドライバーポイントでも1ポイント差の2位に浮上した。さすがにフルウェイトとなる今回は苦戦を強いられそうだが、どれだけ上の順位でゴールできるか。前回、3位のWILLCOM ADVAN VEMAC 408Riにとって、もてぎは昨年も予選トップだった相性のいいコースとあって、今季初優勝の期待がかかる。また、エンドレスアドバン洗剤革命Zにもまだタイトルの可能性が十分残っているだけに、そろそろ2勝目が欲しいところだ。

今回から予選は、初めて「ノックダウン方式」が採用される。1回目は基準タイムクリアに当てられ、グリッドが決定するのは2回目から。F1の予選方式とほぼ共通し、三分割されたセッションごとに絞り込まれ、最後のセッション3では8台（GT300クラスは12台）で競い合う。この間、タイヤは1セットしか使えないので、タイヤマネジメントも順位を大いに左右する要素となるだろう。

レースウィークに持ち込まれるGT500クラス用のドライタイヤは構造1種類、コンパウンドが2種類。ともに対応温度は広く設定されているため基本はソフトの使用が推奨される。レインタイヤも構造1種類、コンパウンド2種類。GT300クラスのドライ、レインタイヤもまた構造1種類、コンパウンド2種類だ。今回は合計で約1300本のADVANレーシングタイヤが用意される。



2007年 SUPER GTシリーズ第7戦用ADVANTイヤラインアップ

		GT500	GT300
ドライ用スリック	構造	1種類	1種類
	コンパウンド	2種類 (M, S)	2種類 (MS, MH)
	サイズ	330/710R18, 330/710R17	250/650R18, 280/680R18, 280/710R18
ウエット用レイン	構造	1種類	1種類
	コンパウンド	2種類 (S, M)	2種類 (S, M)
	サイズ	330/710R18	250/650R18, 280/680R18, 280/710R18

ADVANドライバーズトピックス 飯田章選手の若手ドライバー育成術

関口雄飛選手って、どんなドライバー？
飯田章選手は若手をどう鍛える



今年からRACING PROJECT BANDOのウェッズスポーツセリカをドライブすることとなった、飯田章選手と関口雄飛選手。飯田選手は言わずと知れた、もはやベテランの域にも入りつつあるドライバーで、GT300クラスには今年が初挑戦。一方、関口選手はSUPER GTのルーキードライバーとあって、ふたりのキャリアは極めて対照的だ。その意味において、飯田選手にはチーム加入に際し、関口選手の育成という役割も託されていたが、それは、自身もやらねばならないと感じていたことなのだという。「僕らの年代が、レース業界を立て直していかなきゃいけないとは、うすうす感じてはいたんです。それはドライバーだけじゃなく、メカニックに対する環境とか、さまざまであって。だから関口選手をGTドライバーとして一人前にするっていうのは、その最初の取り組みだな、と。ただ、才能はすでにありました。だてにフォーミュラトヨタやFCJで勝ってはいないなあ、と最初からそれは感じましたね」

特に飯田選手が関口選手を高く評価するのは、コントロール能力の高さ。それは開幕当時から力説していた。「どんなにクルマを振り回しても、へっちゃら。多少荒削りではあるけど、そのへんはすごいよね」と。それだけにドライビングより、指導していったのは、それ以外の要素が大半を占めたという。

「やんちゃだし、慌てんぼだし、とにかく速く走ることしか考えていない、というのが第一印象だったんです。若いからそれでもいいというのは、もう昨年までの話で、これからはもっと全体を見渡してレースしなくちゃ

いけない。特にGTというレースではね。だから、最初はこいつをどう落ち着かせようか、というところから始まって(笑)。そこからレースの仕方とか、そういうことだけで、教えたのは。ただ、僕らの頃とは時代も変わっているので、この優れた才能を生かすには体制も整えていかないと駄目だっていうか、関口選手に合った環境にしなきゃならなかった。それにちょっと時間もかかったかな。ひとつの環境が誰にでも合うという時代じゃないと、僕は思うんです」

シリーズ前半戦は、思うような結果はなかなか残せなかったが、飯田選手と関口選手の希望が叶う時が、ついに第5戦・SUGOで訪れる。それは初優勝という形で。この時、改めて飯田選手に関口選手を評価してもらったところ……。

「速さに関しては、もう80点とか90点をあげてもいいと思う。でも、まだ勉強してほしいこともあるし、もっと成長してほしいから、ドライバーとしての今の総合評価は60点」

飯田先生の評価は、まだまだ厳しいが、これが持ち前の速さと肩を並べるようになった時が、今から待ち遠しくてならない。

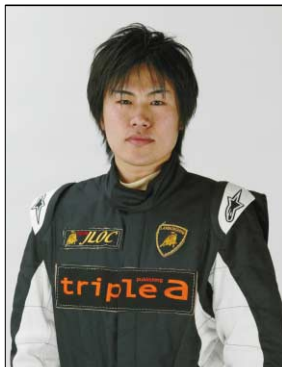
飯田 彰 いいだ あきら

©GTA



1969年・神奈川県出身。1989年に富士フレッシュマンレースでデビュー。その後N1耐久やJTCCを経て1994年にル・マン24時間耐久や全日本GT選手権等に参戦。2002年全日本GT選手権シリーズチャンピオン獲得。その後、数々のカテゴリで活躍。2006年SUPER GT500クラスで「トヨタSC430」、2007年よりGT300クラス「ウェッズスポーツセリカ」ともにADVAN装着車で戦い、今年第5戦SUGOにおいて関口雄飛と共に優勝を飾っている。

GT300ルーキーにインタビュー



©GTA

くりはら・むねゆき

1982年12月15日生まれ、栃木県出身。1998年からカートレースを始め、2001年から2年連続でSL全国大会を制覇。04年の途中からFJ1600に出場し、年末の日本一決定戦で4位に。翌05年はもてぎシリーズで1勝を挙げるに留まったものの、日本一決定戦では2位となる。06年にはF4にステップアップ。東日本シリーズでは4戦4勝でチャンピオンを獲得。初開催のF4日本一決定戦も制して最優秀選手に。



栗原宗之 / JLOC

今回紹介するルーキードライバーはJLOCからエントリーの栗原宗之選手。昨年はF4レースを戦い、東日本シリーズでチャンピオンを獲得したばかりか、出たレースすべてで優勝。双子でレースしていることでも知られ、この宗之選手は弟の方。今年は古谷直広選手とともに、ランボルギーニ・ガイヤルド RG-3を走らせませす。

——最初に、SUPER GTに出られるようになったきっかけは？

栗原「去年、F4で最優秀選手に選ばれ、ヨコハマの推薦でJLOCのオーディションのチャンスをいただいたのがきっかけです」

——クルマの完成が遅れて、まだ出たのは……。少ない中でGTにはもう慣れましたか？

栗原「まだ岡山と富士だけなんです。走るたびに状態が変わっているんで、このクルマに慣れるというほど走り込めていないというか。しかも、フォーミュラ と比べると重さが全然違うので、乗っていると荷重の移動を大きく感じます。その分、運転も丁寧にしないと、すぐにスピンしちゃうので、今、そこが最も苦労している点です」

——パートナーの古谷選手から、何か教わったようなことはありますか？

栗原「GT500の使い方とか、クルマの特性を引き出して、ロスなく無理なく完走するには、どうしたらいいかとか。もちろんドライビングだけでなくメンタル的なことから、極端なところではドリンクの飲み方まで教えていただいて、すごく勉強になっています」

——もてぎは地元とあって、たくさん応援団が来るでしょう。皆さんに向けて意気込みを。

栗原「もてぎは自分のホームコースという意識があるし、ここではいい走りをしたいです。マシンが仕上がってくれば、間違いなくいいレースができると思いますし、多少無理してでも速く走りたいて思います。こういうところで結果を残して、みんなにアピールしていかなければ、と。もてぎではFCJで兄(正之)が先に勝っているんで、僕だって負けてはいられませんからね。観客の皆さんもぜひ僕らを応援してください!」